

茶の湯に吹く風

みる・きく・ふれる現代アート

2023.
7.8^土-8.27^日

開館時間 | 9:00-18:00 (最終入場 17:30)
休館日 | 毎月第3火曜日 *期間中は7月18日、8月15日
観覧料 | 大人 300円、高校生 200円、中学生以下無料
主催 | さかい利晶の杜 指定管理者 SAKAI 緑プロジェクト
協力 | 花王株式会社 KAO、陶芸家 屋馬和代、阪堺電気軌道株式会社
企画協力 | 堺市博物館

Artist マスラックス
MATHRAX

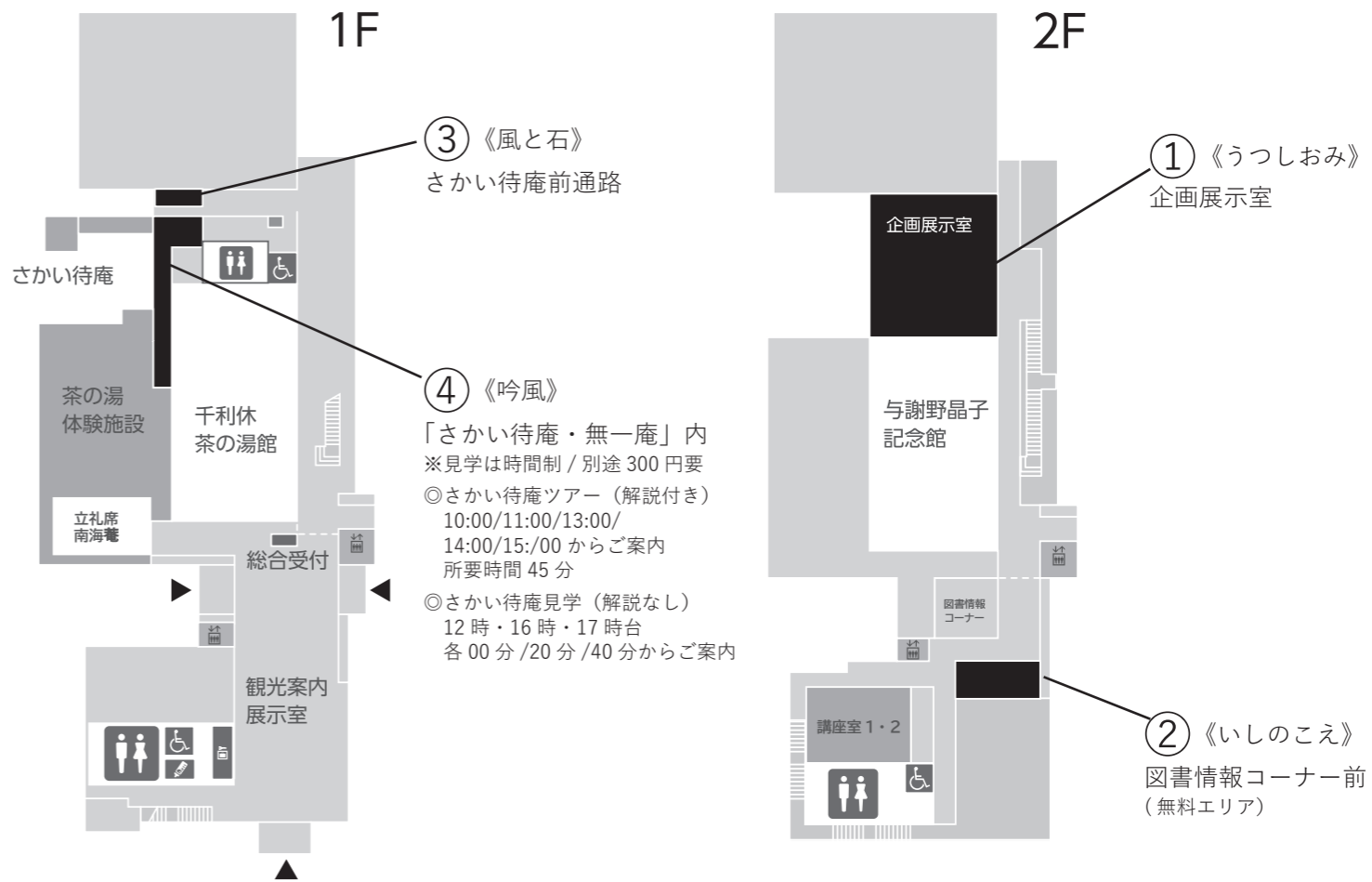
今回の展覧会のテーマは、茶の湯の世界と現代アートの出会いです。会場である「さかい利晶の杜」は、千利休の屋敷跡に隣接し、堺の歴史を広く発信している文化観光施設です。今回、私たちは、千利休の大成した「侘び茶」に垣間見える現象に着目し、現代における侘び寂びとは何なのか、制作を通して考えてみることにしました。

マスラックス MATHRAXは、これまでに、人と人、人との、人と環境の間に生まれる相互関係や働き、人の構想力をテーマに作品の制作を行ってきました。それらは、鑑賞者が「ふれる」ことによって場が作られていくという、時間の流れを伴った体験型の作品となっています。

茶の湯の世界においても「ふれる」ことは、ものや空間を清める大切な所作であり、そこに居合わせた人々の気持ちをはっきりとさせるための要素と考えられています。これは、「一座建立」という、亭主と客が共に場を作り上げていく時に生まれる、特別な一体感へとつながります。

今回の展覧会のテーマにとっても重要な「侘び寂び」の概念は、日本文化の中でも重要な価値観であり美観と言われます。千利休の「侘び茶」が生まれた背景にも、戦国時代の厳しい世の中で人々が生き抜くために身につけた人生観や世界観の醸成があったことでしょう。それは、世俗的なものや権勢のしがらみから脱却し、精神の自由を見つめる術でもあったのかもしれませんが。千利休らの茶人が「侘び茶」を大成した流れには、彼らが自分自身の存在をも探究し、人の生きる力の根源を見つめた形跡も感じます。

本展では、もし千利休が今、茶事を催したらどのような体験となるだろうかと想像しながら、既存の作品に新たな香りを取り入れて再構成しました。また、堺の陶芸家とのコラボレーションによる、お茶碗にふれて体験する新作も展示しています。茶の湯と現代アート、この相互の世界観が、来場者の皆さんの新しいイメージーションと発見を生む機会となれば幸いです。



① 《うつつおみ》

形態 インスタレーション
制作年 2019
素材 木、電子部品、LED照明、香料
サイズ 可変
協力 茅ヶ崎市美術館、花王株式会社 感覚科学研究所

《うつつおみ》は、「今この世に生きている人」という意味を持つ体験型の作品です。2019年、目の不自由な小倉慶子氏と、そのパートナーである盲導犬のリルハと共に、神奈川県茅ヶ崎市の街を歩いた体験をもとに制作しました。彼らの歩みには、お互いの信頼関係を推進力としたリズムがあり、私たちには、彼らが生と死の境界を軽やかに進んでいくようにも感じられました。

この作品のねらいは、この2者の関係性を、体験者とその人の手という形に置き換えることによって、誰もが自分と自身の手の紡ぎ出すリズムを感じられることにあります。体験者は、自分の感じているもの、あるいは指の感覚、空間の変化など、さまざまな場所へ意識が向けられ、それらが今現在の目の前の世界を作り上げています。

この移りゆく意識から世界を構成しようとする試みと、千利休の侘び茶によって導かれる世界との間には、多くの共通点を感じます。それはまた、茶の湯における亭主と客との一座建立や、賓主互換の境地にも通じ合う部分があるとも考えられます。この作品体験で風のように自由になれたなら、今まさにその人独自の世界が開かれるのかもしれない。

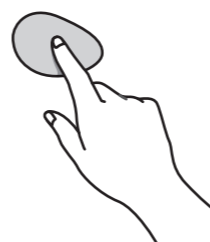
香りと調香のコンセプト (香料制作: 花王株式会社 感覚科学研究所)

展覧会のテーマや会場、その土地の歴史などをもとに、その都度、特別な香りを調香師の方と制作しています。今回の香りは、茶事に招かれ茶室へ向かう時の露地の様子、ほの暗い小さな茶室で振る舞われる亭主のお点前、そしてお茶の世界で何かを見つけ静かに戻ってくる日常の3つの情景をイメージし、風・玄・妙と名づけました。

風 …露地を吹き抜ける風
・ダイダイ (夏の風)
・ミュゲ (打ち水と苔)
玄 …陰翳と無限の間
・パチョリ (ほの暗さ)
・お香の香り (茶室空間)
妙 …新たな世界・静寂と永遠性
・ラブダナム (静寂)
・ベンゾイン (永遠性)

② 《いしのこえ》

《いしのこえ》は、とあるネイティブアメリカンの「石の声を聴くスキル」とその逸話からインスピレーションを受けて制作したものです。彼は荒野でのサバイバルの修行中に命の危険にさらされ、その極限状態のなかで、不思議な光を放つ石から火を起こす方法を聴きます。彼はその教えの通りに石を削り、火打ち石にし、その火で身体を温めて生き延びます。それは、他の人には見えない光や、彼にしか聴こえない声だったのかもしれませんが。ですが、それは確かに〈わたし〉と石との間に生まれたものでした。今、あなたと石の間にはどのような声が生まれているのでしょうか。



③ 《風と石》

「風」は、茶の湯にも関係の深い禅の世界において、見えないものや常に移ろいゆくものを意味しています。また、同時にどこにでも存在するものである、という仏性も表しています。この《風と石》は、鑑賞者が「風」そのものになり、石や石の周辺に指を滑らせることによって、季節や風景を想起させる作品です。

雨水 The rains
形態 オブジェ
制作年 2020
素材 石(ソーダライト、水晶、パイライト)、木(クロガキ、ウォールナット)
電子部品
サイズ 約H160×W500×D120

小雪 Light snow
形態 オブジェ
制作年 2020
素材 石(水晶、アメジスト、タイガーアイ、ラブラドライト)
木(シャムガキ、ウォールナット)
電子部品
サイズ 約H160×W500×D160

④ 《吟風》

形態 インスタレーション
制作年 2023
素材 陶磁器、木(ホオ)、樹脂、電子部品
サイズ W1330×D295×H1000
協力 陶芸家 屋馬和代
井戸茶碗(黎明)、黒楽茶碗(黄昏)、現代茶碗(新風)

《吟風》は、「さかい待庵」と「無一庵」という2つの茶室の間の通路に設置された、お茶碗にふれて体験するインスタレーション作品です。展示台の上の3つのお茶碗は、入口側より「井戸茶碗」、「黒楽茶碗」、「現代茶碗」の順に並んでおり、堺の陶芸家・屋馬和代氏によって制作されたものです。そこには、侘び茶の祖と言われる村田珠光が「不足の美」を発見するきっかけとなったと言われる高麗の雑器「井戸茶碗」、千利休が究極の侘び茶のために瓦職人に制作を依頼した「黒楽茶碗」、そして、現代の侘び寂びについて思いを巡らせながら屋馬氏に制作いただいた「現代茶碗」が配置されています。

これらのお茶碗は、侘び寂びの歴史を想像しながら表現された3つの「点」です。鑑賞者がそれぞれのお茶碗にふれ、それらの制作方法や手触りから導き出された感覚を紡ぐことで、各々の中に現代の侘び寂びの姿が浮かび上がるかもしれません。できれば、ぜひ目を閉じて、お茶碗から手に伝わる質感と、歴史の時間をめぐる想像を楽しんでいただけたらと思います。



茶室の掛け軸について

さかい待庵「老古錘(ろうこすい)」
無一庵「無理会(むりえ)」

茶室には、MATHRAXの作品世界に共鳴するような掛け軸をかけていただきました。さかい待庵の「老古錘」は使い古されて先の丸くなった錘を意味していますが、これは時間の経過によって生じる「寂び」の表象です。年を重ね、円熟した僧侶を表しているとも言われ「千利休」を指しています。

一方で、無一庵の「無理会」は、時間の概念や理屈のない永遠の世界を意味し「侘び」の表象です。時間の概念がなく、私たちにはあからさまに認識できない世界ですが、私たちはこうした2つの世界を信じ、双方を行き来しながら、これまでにない創造をしようとしているのです。